



東北地方で相次ぐ地震。9月1日は防災の日です。 地震に強い家づくりをあらためて考えましょう。

去る7月26日、宮城県北部を震源として震度6の地震が、未明、朝、夕方と同じ日に連続3回も発生しました(マグニチュードの最大は6.2)。東北地方では5月26日にも宮城県沖を震源とする地震(M7.0)が発生したばかりです。この地域では、1978年の宮城県沖地震(M7.3)で7万戸以上もの住宅が甚大な被害を受けたことを教訓にして、耐震性の高い家づくりが行なわれていました。しかし、度重なる地震と、梅雨の長雨でゆるんだ地盤が土砂崩れを起こすなどの災害が重なり、想定していた以上の被害が発生。宮城県内の住宅だけでも全

壊583棟、半壊1,793棟、一部損壊7,444棟、他に多数の公共施設や商業施設が被災しました(宮城県庁発表、8月15日現在)。

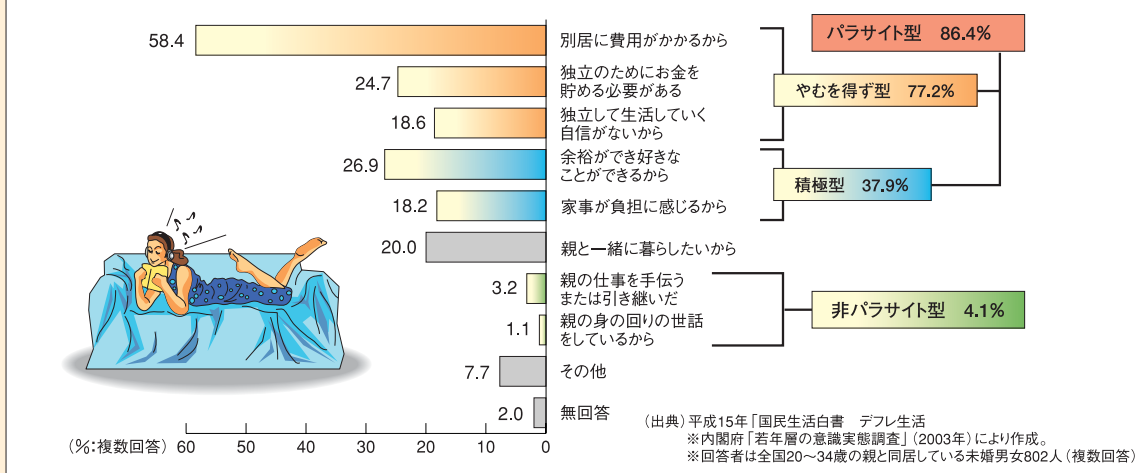
さらに、8月に入ってからは、台風10号が全国各地で猛威を振るいました。自然の脅威は、しばしば人間の想像を超える力で襲いかかってきます。住宅自体の耐震性を強化することはもちろん、建設用地や周辺の地形・地盤の状態、地域の気象の特性までをトータルに考慮した設計・施工で、万一の災害に備えることが重要です。

変化する家族の形。大人ばかりの世帯が増加。

平成15年版国民生活白書によると、親と同居している未婚の若年者(20~34歳・男女)は約7割で、同居率そのものはこれまでと大きく変化していません。しかし、その実態として、「経済的に自立できないから」とか、「家事を親がしてくれるから」というように、何らかの形で親に生活を依存している「パラサイトシングル」と呼ばれる若年者が多数いることがわかりました。

同時に、若年者の晩婚化、非婚、DINKSの増加、その結果としての少子化といった社会現象が起こっており、現代では大人ばかりが暮らす家が増えています。「家族」の構成やあり方が大きく変化しています。これまでのような子育てファミリー中心の住宅づくりから、さまざまな住まい方に合わせた住宅づくりへと広がりを見せています。

未婚者が親と同居している理由



くうきはなし

厚さ3mmの命のベール、オゾン層破壊は今も続く

地表から約20kmの上空の成層圏。希薄な空気にはオゾンが含まれており、皮膚がんや白内障などを誘発する太陽光線中の有害紫外線を吸収してくれています。

ところでこのオゾンの量は、0℃で1気圧の状態では厚さわずか3mm。10円硬貨2枚分にすぎない。この薄いベールが、地表に暮らすすべての生物の命を守っているのです。

オゾン層を破壊すると言われるフロンは、国際ルールによって使用や廃棄が厳しく制限されており、最近、米航空宇宙局(NASA)は、高度35—45kmの上部成層圏のオゾン

層観測結果から「破壊のペースが鈍化し、回復の兆しがみられる」と発表。しかしその半面、これまでに大気中に放出してきたフロンは、現在もオゾン層をむしばみ続けており、成層圏全体のオゾン量についての環境省の分析では、回復の傾向は見られませんでした。いずれにしても、フロンの適正使用と処理についてのルールは、今後重要だといえるでしょう。

